マリア様がみてる
～いつか花咲くときに～

霧野知秋

サークル・クロスロード

マリア様がみてる
～いつか花咲くときに～

もくじ

一通の手紙……10

とまどいのスタート……48

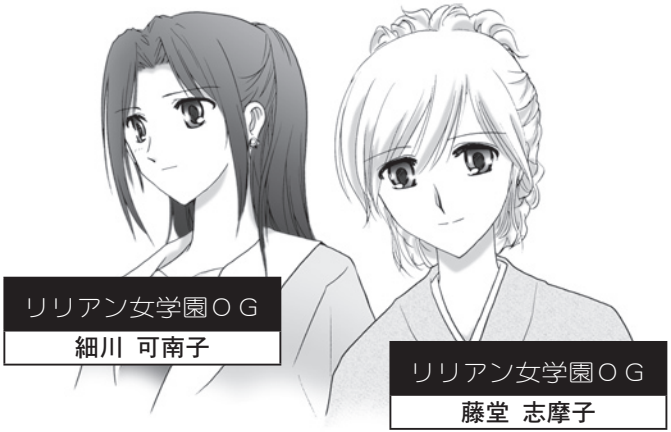
最初の授業……80

心の在処……119

いつか花咲くときに……135

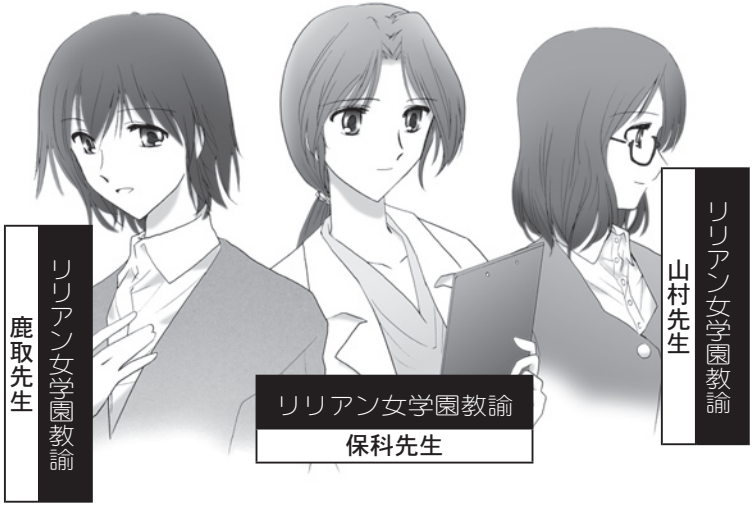
あとがき……154

主要登場人物紹介



リリアン女学園ＯＧ
細川 可南子

リリアン女学園ＯＧ
藤堂 志摩子



リリアン女学園教諭
鹿取先生

リリアン女学園教諭
保科先生

リリアン女学園教諭
山村先生

リリアン女学園一年生
渥美 未来

リリアン女学園ＯＧ
二条 乃梨子

いつか花咲くときに

イラスト／しづきみちる
ロゴデザイン／ｖｕｎｙａ

一通の手紙

1

「ふわー、疲れたぁ」
二条乃梨子はワンルームマンションの自室に帰ると、郵便受けに入っていた荷物を机の上に放り出し、そのままベッドに横になった。
何枚もの履歴書を入れたカバンは、方向も定めず投げ捨てる。
「またダメだったし。仏教学科のどこが悪いっちゅーの」
四年余りの京都暮らしの間に、いつの間にか少し移ってしまった関西弁で、思わず乃梨子はつぶやいた。
「他の学部の人は、結構内定貰ってるって聞くし。やっぱり選択間違えたのかなぁ？」
低い天井を見上げると、見慣れたシミが見えた。
シミを見ながらじっと考える。
リリアン女学園での三年間を過ごした後、乃梨子が進路に選んだのは、自分の好きな仏像への知識を一層深めることであった。

仏像を中心とした仏教美術が学べるのは、ごく限られた仏教系の大学だけ。
リリアンと同じ丘の上に立つ花寺大学にも仏教学科があり、そこで仏像美術についての専攻もあったのだが、残念なことに花寺大学は男子しか入学出来ず、乃梨子は志摩子さんのお父さんやタクヤくんの薦めを得て、京都にある大学に入学したのである。
ちなみに両親と妹は今更何を言っても無駄と、諦め気分で送り出してくれた。
それから四年――
仏像鑑賞のサークルに入った乃梨子は、休日も近隣の仏閣に参詣し仏像鑑賞に勤しむという、乃梨子にとっては最高の環境を満喫していたのだが、最高学年に上がるこの春前から、さすがにそうも言ってられなくなってきた。
進路選択の時期が迫っていたのである。
「あー、もう」
煮詰まった乃梨子はごそごそと脚を動かしパンストを脱ぎ捨てると、「えいっ」という掛け声と共に上体を起こしてスーツを脱ぐ。
そのまま下着も一気に脱ぎ捨てると、ユニットバスの扉を開けた。
水栓を回すと給湯器で温められた熱いお湯が流れ出る。
「あ、あつつ……」
少し熱すぎたので、慌てて隣の栓を回して温度を調整。

丁度いい塩梅（あんばい）になったところで、そのままシャワーのノズルを頭の上に持っていく。
お湯が黒髪を濡らし、乃梨子にまとわりついた。
一瞬、息が出来なくなる。
そのままの状態をしばらく保つと。
「ぷふぁぁ」
乃梨子はシャワーのノズルを外すと、大きく息をついた。
洗面台からメイク落としを取り、鏡に向かう。
二度三度洗ったあとで出てきたのは、高校時代とさほど変わらぬ自分の顔。
「私、一体なにやってるんだろ――」
鏡の中の自分に向かい、話しかける乃梨子。
「仏像の背景について知りたくって仏教学科に入ったけど、いざ四回生になってみたら就職先の内定も貰えないし。とは言っても院に行って専門で研究していくなんてことは出来ないしなぁ」
ため息一つ。
「なーんか、高校のときが懐かしいや。白薔薇（ロサ・ギガンティア）さまなんて呼ばれて。今考えたら夢みたいな生活だよな。お姉さまとか」
乃梨子の脳裏に志摩子さんや、山百合会（やまゆりかい）の仲間が思い出される。

ホンの数年前の話なのに、今の乃梨子にとっては遠い世界の物語にしか感じられない。今の乃梨子はどこにでもいるただの女子大生でしかない。
乃梨子は想いを振り切るように、再びシャワーを頭から被った。
お湯を止めると、バスタオルを巻いて外に出る。
濡れた黒髪を拭いてドライヤーをあてると、乃梨子は何とはなしに机の上に放り出していた郵便物を手に取った。
「あれ？」
どうでもいいダイレクトメールの中に、一枚だけ白く輝く封筒が入っていた。
差出人を見ると、乃梨子の母校――リリアン女学園高等部とある。
「何だろ？」
（またＯＧへの寄付集めとかかな？）
そんなことを思いつつ、乃梨子は引き出しからペーパーナイフを取り出し、封筒を開けた。
中には何枚かの書類が入っている。一枚目には『教育実習のお知らせ』と書かれていた。
広げてみると、教育実習の手引きや必要な封筒も含まれている。
「あー、もうそんな時期なんだ」
壁に掛けられた仏像写真のカレンダーをめくると、乃梨子はうなずく。

乃梨子は別に教師になりたいわけではなかったが、履修を選択する際に、少しだけ余分な講義を受けていれば教員免許が貰えたので、深く考えることなく教員免許の取得コースも受講していた。

去年末に教育実習の申込用紙を貰った折、てっきり実習は母校でやるものばかりだと思いこんで、リリアン女学園での実習を申し込んだのだが、後で近くの学校でも構わないと知った時は既に遅し。

四回生になったばかりのこの五月、乃梨子はリリアン女学園での二週間の教育実習を送ることが決まったのだ。

「確かゴールデンウィーク明けに学校でオリエンテーションやって、実習はその次の週の月曜日からだったかな？」

カレンダーをめくる乃梨子。

就職活動も続けなければならないこの時期に、二週間以上も拘束されるのは正直つらいが、教員免許があればなにかの足しになるかもしれない。

悩みどころだが、実習に行かないと今まで取ってきた単位が無駄になることもある。

「やっぱり仕方ないかぁ」

心の中で当たり前のことを確認して、乃梨子は書類に目を通す。

「えっと、実習期間は来月の第三週と第四週。場所は当然リリアン女学園。千葉の実家から通